

ご当地公園調べ隊としての調査活動における実践報告

清水 幸子

キーワード ご当地 公園 保育者養成 子どもと遊び 遊具

はじめに

近年、地域や社会の変化によって、子どもの遊び場や地域の自然環境は大きく変容している。本学が位置する長野県では、平成 27 年から信州型自然保育を本格的に推進する活動が始まっている。この活動は幼児期の子どもを対象に、屋外での遊びや運動を中心に様々な体験を深めること、また多様な自然や地域の環境を活かし、子どもたちの知的好奇心や感性が豊かに育まれるよう「信州型自然保育認定制度」としてスタートし、より親しみやすいよう「信州やまほいく」の愛称で普及が始まっている。県ではこれまでも豊かな自然環境を使った様々な体験活動は保育・幼児教育の現場でも実践されてきているが、地域資源と密接に関係し、雄大な自然の中で、ふるさとのあたたかさを全身で感じながら成長できる環境づくりをより一層すすめていく活動内容となっている。

さらに全国的な取り組みとして、子どもの体力の現状についての報告によると、基本的な運動能力の低下が指摘され、文部科学省（2013）は平成 24 年 3 月に「幼児期運動指針」を策定し、全国の約 35,000 の幼稚園と保育所に幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力等を培うこと等に努めるようその指針を通達し、翌年ガイドブックを発行。遊びの時間、遊ぶ場所そして仲間、保育者だけでなく保護者も共に体を動かす時間の確保も必要とされている。

そこで、最も身近な戸外での遊び場所として、地域の公園が遊び場の一つとしてあげられる。地域の方々が集う場所として、広場や固定遊具などがあり、全国に数多く設置されている。これまで公園に関する研究では、北村（2009・

2010) の小学生以下の子どもをもつ母親へのアンケート調査によると、子どもがふだん外で遊ぶ場所として最も多くあげられたのは「公園」であり、また地域(歩いていける範囲、小学校区内)に「子どもが自由に、のびのび遊べる公園」が少ないと答えた人は63.7%と報告している。国土交通省(2015)によると、平成26年度末の全国の「都市公園」※1は105,744か所設置されており、都道府県別では、東京都が最も多く8036か所、ついで北海道で7582か所、神奈川県で7389か所である。本学のある長野県については県内に954か所設置されており全国で32位であり、平成17年度からの10年間で134か所増加し、年々増加傾向にあると報告されている。

※1「都市公園」とは国土交通省によると、都市公園法にもとづいて市が設置・管理している公園であり、都市住民のレクリエーションの空間となるほか、良好な都市景観の形成、都市環境の改善、都市の防災性の向上、生物多様性の確保、豊かな地域づくりに資する交流空間など多様な機能を有する都市の根幹的な施設として位置付けられている。その分類には住民の利用を主たる目的とする住区基幹公園と、広域的に利用される都市基幹公園とに分けられる。住区基幹公園は、街区公園、近隣公園、地区公園の3種類に分類されている。

そこで本論では、保育者養成校で学ぶ学生が、地元にある地域の「公園」を「ご当地公園」と称し、子どもの頃遊んだ公園に現地調査に行き、子どもの頃に見た景色と今とどのような違いがあるのだろうか。またその公園はどのような環境なのか、他の公園との違いや特徴等についてまとめる活動を始めた。また、この活動は「ご当地公園調べ隊」とし、調査活動を行った。

「ご当地公園調べ隊」の活動目的は、保育者を目指す学生が、公園内の固定遊具や公園環境について調査し、安全面や今後の利用における注意点や、地域の新しい情報や発見についてもまとめ、報告することとした。さらに活動は互いに情報交換し、他の公園についても情報を共有することを活動内容に含めた。事前学習として、これまでの保育実習や教育実習では園庭での固定遊具での遊び、園外活動での散歩や公園での遊びについての支援方法、さらに保育内容演習(健康)や幼児体育においては子どもの遊びや安全対策について理解を深めている。

本論は、まず実践事例を報告し、保育者養成校で学ぶ学生の学習成果と得られた課題を明らかにするとともに、今後の活動の展望について考察する。

実践報告（ご当地公園調べ隊としての活動）

1. 実践の方法と目的

(1) 対象者（隊の構成員）

- ・信州豊南短期大学幼児教育学科2年生（男子2名、女子8名 計10名）
- ・幼稚園教諭2種免許状及び保育士資格取得を目指している学生である。特に身体を動かして活動することを好む学生であり、1年次にキッズスポーツインストラクター資格を取得済みの学生である。
- ・本ゼミナールを選択希望し、地元の公園に久しぶりに足を運び、調査しまとめることに初めて取り組んだ。

(2) 実践方法

科目名 保育実践演習1、保育実践演習2 各15コマ（全30コマ）

シラバス（授業計画）は、表1に示す。

表1 シラバス（授業計画）保育実践演習1・2

コマ	テーマ	内容
1-1	ご当地公園調べ隊としての活動について	今年度の制作や活動について説明
1-2	公園調べ①	どの公園を調べていくのかを検討
1-3	公園調べ②	リストアップした公園からの絞り込み
1-4	調査の仕方について①	昨年度調査研究した公園に実際に行き、制作した内容から、具体的な調べ方や方法について確認する。
1-5	調査の仕方について②	調査内容について検討会
1-6	調査票の作成	調査票の活用方法について話し合う。
1-7	園庭調べ①	実習園での園庭遊びを調査（年齢別遊び）
1-8	園庭調べ②	実習園での園庭遊びを調査（固定遊具での遊び方）

1- 9	園庭マップ作成①	園庭マップ作り（下地）
1-10	園庭マップ作成②	園庭マップ作り（構成）
1-11	園庭マップ作成③	マップ交流会（発表）
1-12	公園調べ③	現地調査
1-13	公園調べ④	現地調査
1-14	公園調べ⑤	調査まとめ
1-15	公園調べ⑥	情報交流会
2- 1	公園調べ（全体用）①	全員で作成する予定の公園を下見
2- 2	公園調べ（全体用）②	各担当場所を調査及び撮影
2- 3	公園調べ（全体用）③	調査したデータをまとめる
2- 4	公園調べ（全体用）④	撮影データをまとめる。
2- 5	園庭マップ発表	大学祭用に展示準備
2- 6	園庭マップ発表	展示
2- 7	公園マップ作成①	個人作業
2- 8	公園マップ作成②	個人作業
2- 9	公園マップ作成③	個人作業、意見交換
2-10	公園マップ作成④	個人作業、意見交換
2-11	公園マップ作成⑤	全体用制作
2-12	公園マップ作成⑥	全体用制作
2-13	公園マップ作成⑦	全体用完成
2-14	公園マップ発表	学内展示
2-15	公園マップ発表	まとめ アンケート実施（振り返り）

この授業は、各ゼミナールごとに実施されており、実習指導、就職指導、スポーツ活動へのアシスタント研修も年間を通して内容として含まれている。

その中で「ご当地公園調べ隊」の活動は、毎時間設定し卒業制作の一つとして進めていく。制作は一人ずつ各公園を1枚（A3サイズ）の画用紙にまとめ仕上げる。その際のデザインや構成は各自が考える。内容は現地で調べた調査票から書き写し、実際に撮影してきた写真、また地域の観光パンフレットやホームページも参考に、地図やパンフレットに記載されない場所やイベント情報など公園を中心としたご当地（地元）情報も盛り込

む。また、本学周辺の比較的大きな公園を一つ選び、全員で調査し制作する。それぞれの完成した制作物は作品として大学祭や各種行事などで展示し、地域の方々や在校生に見てもらおう。

さらに、アンケートやプリントを用いて、活動の様子やこの制作活動に対する考えや感想を記録する。

(3) 実践の目的

- ・地域の公園を知ることは、地域を再発見できる。
- ・子どもたちの今を観察することができ、現場で活かしていく。
- ・公園内の固定遊具や公園環境について検証、その際、保育者としての視点で安全面や環境を考える。
- ・戸外遊びや園外活動の際の観察力や総合的な判断ができる。
- ・今と昔の公園の変化を知る。
- ・情報交換することで、他の地域の公園事情や様々な固定遊具や遊び、地域の特徴を知り、幅広い学習効果が期待できる。

この科目は幼児教育学科卒業必修科目であり、ゼミナールごとに1年を通して演習課題に取り組み、活動している。本ゼミナールでは戸外遊びをテーマに「園庭環境と子どもの遊び」、「ご当地公園調べ隊（たい）」を調査研究している。

2. 展開の様子

(1) 調査過程

(a) 調査公園の選定

自分の住む地域の公園を各自で決める。

(b) 現地調査

準備物（調査票、筆記用具、メジャー、カメラ）

(2) 調査報告

(a) 現地で撮ってきた写真や、調査した内容を報告

(b) 意見交換

(3) 制作過程

(a) 写真の整理

現地で撮影した画像を確認

サイズ調整と画質調整

(b) 街の特色を調べる

市町村の公式ホームページや、観光協会が発行しているパンフレット、
旅行ガイドブック

(c) 画用紙の色を決定（背景の確定）

(d) 下書き（レイアウト）

規定は設定せず、自由にまとめる。

(e) 仕上げ

カラーマジックや色鉛筆等での色つけ、写真の貼り付けなど画用紙全体
が整うように仕上げで完成（図1、図2）

(f) 最終仕上げ

完成した作品をラミネート加工し、色あせや剥がれを防止、長期保存が
できるようにする。



(図1)



(図2)

(4) 活動の様子

(a) 辰野町にある荒神山スポーツ公園に行き、調査の方法について事前学習
を行った。

学生の様子及び感想（4時限目：現地調査の仕方について）

学生の中からこのようなやり取りが見られた。

「この町は遊具にすごくお金をかけているね?」「H公園も綺麗だよね」「S市は遊具はサビサビ」「私の近くの公園なんて昔は子どもがいっぱいたけど、今は草がポーポーで遊んでいる子は見ない」

…自分の地域と比較しながら調査を進めている様子が見られた。

「平日は小さな子とママばかり」「まだ保育園に入れない年齢だから遊びに来ているのかな?」「3世代できているところもある」「すごい」

…保育者を目指す学生にとって平日の様子が観察できる機会でもあり、とても良い学習につながっている。

荒神山にてグループ活動での調査の様子（図3、図4、図5、図6）



（図3）



（図4）



(図5)



(図6)

(b) 調査公園の選定

大型遊具を中心とした公園や、公民館隣接の公園、区の公園など調査対象とする公園の候補を各自で複数挙げ、情報交換する中で各自1つの公園と、全体で取り組む公園1つを決定した。その結果は次のようになった。(表2)

表2 調査した公園一覧

公園名	市町村
恐竜公園	須坂市
やすらぎスポーツ公園	筑北村
和田西原北公園	松本市
芳川公園	松本市
野村中央公園	塩尻市
ほたる童謡公園	辰野町
上の原ギンギラ公園	辰野町
ぐるぐる公園	箕輪町
乙事公園	富士見町
三峰川榛原河川公園	伊那市
荒神山スポーツ公園(全体用)	辰野町

注) 公園名は正式名称でない公園も含まれている。

(c) 制作の様子

各学生が思い出などを口にしながら、制作に取り組む様子があった。また、それぞれのまとめ方は自由としたが、画用紙（A3）1枚に仕上げるようサイズは指定したため、レイアウトやイメージを作るのに時間を要していた。作業はそれぞれの調べてきた公園をどのように表現し、記述していくのか。公園一つ一つの特徴や、子どもの頃の思い出と今の公園の比較、また保育者養成校で学んでいることから見えてくる環境整備の視点なども考え、まとめようとする姿があった。

このように、ただ見てきたことをそのまま仕上げいく制作ではなく、今の公園の状況や、自分が感じた思いものせた制作となるよう、時間を充分にとって進めていった。学生の中には、何度も同じ公園に足を運び調査し制作に取り組んでいた。また、制作過程の中で他の作品もみながら、さらに作品をよくするために、創意工夫や他の学生からの意見も取り入れ、ご当地の特徴をまとめていった。

(d) 教員の支援

著者は、学生の調べてきた公園について、意見交換をしながら、学生の調査意欲を高め、制作活動がスムーズに行えるように適時助言を行った。例えば、どのような場所にあり、どのような人が利用しているのか、行った時はどうだったかなど、実際に現地に行った時に感じたことがより深まり、子どもの頃の思い出が蘇るよう制作過程の中で会話を交わした。

3. 成果と課題

(1) アンケート結果

最終授業において、公園マップの発表後に学生にアンケートを行った。その結果を示す。

Q 1 はじめ公園を調べるといことを聞いてどのように感じましたか？

楽しそう・簡単そう	8人
大変そう・難しそう	2人

Q 2 調べることでどのような思いがこみ上げてきましたか？

懐かしい	8人
思い出がよみがえる	2人

Q 3 どのようなところでそう感じましたか？（複数選択可）

場所に着いた時	4人
遊具を見た時	4人
公園内を調べている時	4人
公園で写真を撮っている時	2人
そこで遊んでいる子どもたちを見た時	2人

Q 4 その思いは今回の制作の中に入れてはできましたか？

はい	10人
----	-----

Q 5 画用紙にまとめるにあたり、工夫したところやポイントはどこですか？

＜ご当地を知る工夫＞

- ・市の花を枠にして描いた。
- ・村の鳥や花の情報を加えた。
- ・そこから見える景色についても説明を入れた。

＜公園をみせる工夫＞

- ・色合いや広さがわかるように写真を加工した。
- ・写真に色紙を使って鮮やかさを出した。
- ・特に見て欲しい遊具を大きく描いた。
- ・公園の柵を手書きで書き、よりリアルさを出してみた。

＜公園の様子がわかる工夫＞

- ・遊具一つ一つにどのような遊び方が展開されているのか説明を入れた。

Q 6 画用紙の大きさはどうでしたか？

ちょうど良い	10人
--------	-----

Q 7 調査票の（A4 サイズ 2 枚）内容量はどうでしたか？

ちょうど良い	10人
--------	-----

Q 8 作成するにあたり一番大変だったことはどんなことですか？

画用紙にまとめるところ	4人
実際に行って調べる	4人
現地での撮影	2人

Q 9 制作全体を通して一番心に残ったことはどんなことですか？

- ・久しぶりに公園に行ってみて、自分が遊んでいた時よりも遊具が増えていたり、また、少しさびれていたりして、子どもがもっと楽しく遊べるようにして欲しいなと感じたこと。
- ・公園でまた遊びたくなったこと。
- ・昔遊んだ公園に行って、自分で少し遊んでみたこと。
- ・自分が小さい頃に遊んでいた公園について詳しく調べたことで、愛着のようにととても大切にしていきたいと思ったこと。
- ・公園だけでなく、街の特徴まで取り入れて工夫してまとめることができたこと。
- ・公園などをたくさん知ることができたこと。
- ・大きくなって公園へ足を運ぶ機会がなかったのでとても良い機会になったこと。
- ・絵を描くことが好きだったので、とても楽しく行なうことができたこと。

Q10 他の公園の完成作品を観て、どのように感じましたか？

- ・一つ一つ特徴があり、まとめ方も違っておもしろい。

- ・いろいろな公園の良さがわかり行ってみたくなった。
- ・いろいろな公園があることがわかった。
- ・自分が調べた公園にはない遊具があり、地元の人しか知らない情報などが知れてとても良いと思った。
- ・みんなそれぞれの自分の思い入れのある公園を調査していて内容がそれぞれ濃くて良いと思った。

Q11 この学習活動はどのようなところで活かすことができましたか？

または今後活かすことができそうですか？

- ・就職試験の時に活かすことができました。これから子どもたちと関わっていく時に活かせる。
- ・遊具を調べて、子どもの運動あそびについて考えたりすることができ活かすことができました。
- ・今の子どもたちは公園で遊ぶ機会があまりないと思うので、公園の楽しさを伝えていきたい。
- ・危ないところがないか、他の公園に行った時もどの点を注意するべきかがわかりいかせる。
- ・行ってみたい公園を見つけることができました。
- ・今後、保護者の方に紹介することができようになり、子どもたちの遊び場についての理解が深まった。
- ・沢山の公園にふれたことで、より子どもたちの立場に立って遊具や遊びを考え、危険な遊びなども危険予知できるのではと思った。

Q12 制作を終えてこの作品を作ることは、はじめに持ったイメージと変化がありましたか？

- ・まとめるのが面倒だと思っていたが、活動が楽しくなっていった。
- ・公園にそんなに違いがないと思っていたが、それぞれの遊具や環境など

いろいろな違いがあることを知ることができてよかった。

- ・公園を調べて、懐かしくも楽しくできた。
- ・公園調べをする前は公園にはそんなに危険なところなどはないと思っていたが、実際にいろいろな視点で見ると見えてきた。

(2) 成果と考察

[ご当地公園調べ隊としての活動]

地域で育ち、地域で学び、地域の保育者として就職していく本学の学生にとって、地域を調べ、より多くのことを学んでおくことは、今後活かせる学びの一つとして活動を始めた。実際に活動をしている様子から、学生の気持ちの変化や、子どもたちの今を知ること、親子のあそびを観察する機会にもつながり、また保育所での園外活動（おさんぽ）の場としての環境整備のポイントなどの理解も深まり、現場に役立つ実践活動になった。また、他の地域の公園を知ること、遊具の違い、子どもの頃の遊び、人気のあった鬼ごっこや鬼の決め方など地域ごとに特色があると気づかされた。時には行事などのお祭りや、自然環境にも会話が弾む場面も見られ、学生同士の意見交換がゼミナール活動中に頻繁に行われた。一つのテーマで1年を通じて継続的に活動することで、今まで以上に互いのコミュニケーションの深まりも感じられ、ゼミナール活動としてのまとまりが生まれた。

アンケート調査（Q10 他の公園の完成作品を観て、どのように感じましたか？）からは「自分が調べた公園にはない遊具があり、地元の人しか知らない情報などが知れてとても良いと思った。」「みんなそれぞれの自分の思い入れのある公園を調査していて内容がそれぞれ濃くて良いと思った。」など、この活動を通じて、今まで知らなかった知識や情報が学生同士の中から得られた。

また今後活かすことのできる成果として、アンケート調査（Q11 この学習活動はどのようなところで活かすことができましたか？または今後活かすことができそうですか？）に見られるように「沢山の公園にふれたことで、より

子どもたちの立場に立って遊具や遊びを考え、危険な遊びなども危険予知できるのではと思った。」「今後、保護者の方に紹介することができるようになったり、子どもたちの遊び場についての理解が深まった。」など、保育者を指す学生にとって、今後を活かすことができるといった回答がほとんどであり、実践的な活動を通じて地域で学び、地域を調査研究課題としたことがより良い成果につながったと考えられる。

(3) 今後の課題

1つは県内の公園数が把握できていない点である。それは、一言に公園といっても管理者が様々であるからである。県立の公園から、自治会区内、団地内、公民館併設など小さな広場から大きな公園までが存在している。長野県は公民館数日本一の県であり、公民館に隣接された公園も多く見受けられる。すなわち、地図に掲載されない公園は所々に見られ、地域の子どもたちにとっての遊びの拠点は地域の人でしか知らないご当地情報（地元の情報）となっていることが情報共有する中で示唆された。さらに自治会区ごとに管理されている公園や集合住宅地の中にある公園などは管理運営母体も様々であるため、公園数は調査しきれていない。その例として、長野県中信地区にあるC市によると、都市公園は平成27年4月現在で市内に35か所、地区ふれあいひろば102か所、史跡などの公園が2か所、その他公園として4か所以上で、合計143か所存在すると報告されている。人口5万5000人ほどの市であるが予想をはるかに超える公園数であり、都市公園の数から概算した場合、C市には約4倍以上の公園数が存在することがわかった。このことから、県内全域の公園数を算出すると、都市公園（954か所）の約4倍に当たる、おおよそ3800か所以上存在すると推測される。

よって、今後のご当地公園調べ隊としての活動を継続的に行ない、一つでも多くの公園を調べていく必要があると改めて感じた。そして地域を調べる活動を保育者養成校で学ぶ学生の視点でより積極的にこれからも進めていきたい。

また、この活動を通して、少しずつではあるが、地域の公園の現状が把握できるようになり、今後も調査を進めていくことで県内多くの市町村の公園事情が明らかになっていくことと考える。公園はただ存在するだけの場所ではなく、集いの場、憩いの場、遊びの場など用途は多様化し、時には目印にもなり、地域の方々にもっと利用される場所であってほしい。そのためにも地図にはない小さな公園でも地域の人たちが利用しやすい環境整備は今後も必要であろう。

今回の調査では、公園の大きさは学生自らの歩数で表し、色使いや、遊具の種類や大きさ、そして日陰の有無や、周りの交通量、トイレや水飲み場、駐車場の有無、ベンチの数なども調査項目とした。それぞれの公園ごとに特徴があり、学生が子どもの頃に遊んだ遊び方を思い出すきっかけになり、遊具に触れる機会にもつながった。懐かしさや、恥ずかしさの中から、子どもの世界を見て体験できる実践演習としての良い学習効果につながったと考えられる。またこれから進路を決め、社会に出て行く学生が地域を知ることの大切さと、地域をよりよくしていこうと考える前向きな活動の一つとしてじっくりと時間をかけて取り組み、分かりやすく描かれた作品はどれも地域の発展に貢献できる内容にまとまっている。すなわち、地域のこれからの担い手としての活動の一步がもうすでに始まっているのではないだろうか。

今回の活動でもう一つの課題として、本学は中信地域、南信地域からの学生が多く、県内全域を調査対象にしているが、県内のある地域に偏った調査になってしまっている点である。県内すべての公園を発掘することがこの活動の目的ではないため、仕方がない部分ではあるが、調べる公園を年々増やしつつ、活動を継続的に行っていくことが今できる対策の一つである。

最後に、人口減少、少子高齢化が進む今、「公園」は子どもの遊び場にとどまらず、多様な観点から地域の公園の利用について考えていく必要がある。そのため、ご当地公園調べ隊で調査した内容は学内だけではなく、情報発信も合わせて学外展示や発表の機会を設け、地域に貢献できるより良い公園づくりの一翼を担う活動として進めていきたい。

4. おわりに

本学の幼児教育学科に在籍する学生は、子どもの頃から慣れ親しんだ地元から通学しており、地域を一番知り尽くした学生である。ご当地公園調べ隊としての活動は、身近な公園を調べまとめるといった制作自体は難しい活動ではないが、保育実践活動として、保育者としての心や基礎を身につける経験が重要であり、制作を通して得られた心の成長がうかがえる結果となった。公園をまとめる制作と振り返りアンケートの実施と作品展示と1年間をかけて十分な時間を取り、実施したことで他の学生との情報交換や地元についてより深く学ぶことできた。さらに就職採用試験対策の一つにもつながったことは大きな成果と言えよう。

今後ご当地公園調べ隊としての活動はゼミナールの学びの1つとして継続的に活動し、より多くの学生が、地域で学び育つ活動を続けていきたい。

謝辞

本ゼミナール卒業生10名のご当地公園調べ隊としての活動に感謝するとともに、それぞれの新たな旅立ちを祝福いたします。

<文献>

学校体育研究同志会, 2009, 『幼児期 運動あそびの進め方』 創文企画

環境省, 1996, 『環境白書』 「遊びの変化と環境」

菊池秀範・石井美晴, 2014, 『子どもと健康』 萌文書林

北村安樹子, 2009, 「地域の公園環境と子どもの外遊び - 小学生以下の子どもの外遊び空間の実態」, 『ライフデザインレポート』, 44-51

北村安樹子, 2010, 「子どもの外遊び空間と地域の住環境」 『ライフデザインレポート』, 16-27

国土交通省, 2015, 「都市公園整備現況一覧表」 -H26 年度末 都道府県別都市公園整備水準調書 1-

国土交通省, 2015, 「都道府県別一人当たり都市公園等整備現況」

国土交通省, 2015, 「都道府県別の都市公園等の箇所数の推移」

茅野市建設部都市計画課, 2005, 「公園わくわくプラン」

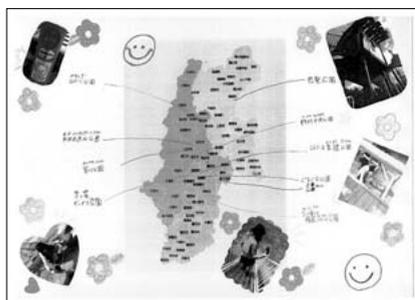
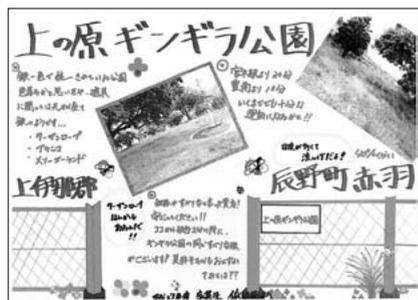
日本学術会議, 2008, 「子どもたちが群れて遊ぶ「公園・ひろば」の復活」 『内閣府ホームページ』

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t62-15-3.pdf#page=1/>

(検索日 2016 年 10 月 17 日).

前橋明, 2016, 『運動遊具の安全管理・安全指導スペシャリスト』 大学教育出版
 文部科学省, 2013, 『幼児期運動指針 ガイドブック』 サンライフ企画

資料1 [学生の制作した作品 (一部)]



資料2 [全員で取り組んだ作品例]

辰野町荒神山スポーツ公園 (A3サイズ上下2枚で構成)

※四季を通じて撮影に行ってまとめたものである。



資料3 [学内展示の様子 (一部)]



資料4 [関連新聞掲載記事 (一部)]

地域の公園に親しんで
大 着手 マップ作り

【大分県】大分県立清水高等学校の生徒が、地域の公園を調査し、マップ作りを行っている。生徒らは、地域の公園を調査し、マップ作りを行っている。調査した公園は、大分県立清水高等学校の周辺にある公園で、生徒らは、公園の名称、面積、設備、利用状況などを調査し、マップに記入している。また、公園の魅力を伝えるための紹介カードも作成している。この活動を通じて、地域の公園をよりよく活用し、地域社会に貢献することを目的としている。

大分県立清水高等学校 清水ゼミ 公園調べ

各地の公園 特徴まとめ
豊南旭大ゼミ 紹介カードを作成

【大分県】大分県立清水高等学校の生徒が、地域の公園を調査し、紹介カードを作成している。生徒らは、公園の名称、面積、設備、利用状況などを調査し、紹介カードに記入している。また、公園の魅力を伝えるための紹介カードも作成している。この活動を通じて、地域の公園をよりよく活用し、地域社会に貢献することを目的としている。

大分県立清水高等学校 清水ゼミ 公園調べ

平成27年1月29日(土)
この新聞